

満鉄 中央試験所 大陸に夢をかけた男たち（八）

杉田望

終章 受け継がれた精神と技術

人目をはばかりながらの旧友来訪

満州とよばれた中国の東北地方には、かつて大勢の日本人が働き生活していた。いつときは百万人も日本人が満州大陸に渡ったと記録されている。とりわけ遼東半島の突端にある大連には、かの地で生活した人々には特別の思いがあるように、大連を「第二の故郷」と懐かしむ人々がいる。

満鉄中央試験所の科学者たちを含めて、留用で最後まで残った日本人が大連から大陸の各地に散っていったのが昭和二十八年のことで、そのときから大連に住む日本人は皆無となった。そこに関係したすべての日本人にとっては、満州と大連は遠い彼方の存在となり、人々には古い記憶のなかにだけ生き続ける世界となっていたのだった。

萩原定司が帰国後、初めて大連を訪れたのは昭和四十八（一九七三）年十月のことであったという。二十年ぶりの大連だった。中央試験所の関係者のなかでは、萩原が戦後一番最初に大連を訪れた人間ということになる。

だが、そのときの中国は、権勢をほしいままにした「四人組」時代のこととて、市内を自由に散策できるような雰囲気ではなかったという。もちろん、旧満鉄中央試験所を訪ねることなど、とてもできる相談ではなかった。旧中央試験所の存在を確かめることすら、車のなかから覗き見る程度で、我慢をしなければならなかった。それでも、萩原定司には懐かしかった。街の風景は少しも変わっていないかった。

そのとき、人目をはばかりるように萩原の宿舎を訪ねてきたのは化学物理研究所の郭和夫と張大煌所長の二人だった。二人の旧友はぎこちなく、どこか遠慮がちだった。それもそうだろう。なにしろ「四人組」の時代のことである。外国人を知己に持つこと自体が犯罪者の扱いを受けた時代であったのだ。旧友を訪ねるのにも勇気を要した。だが、二人はあえて萩原定司を宿舎に訪問した。二人の旧友は信義に厚かったのだ。

二人とも言葉は少なかったが、それでも旧友たちの消息を知ることができたの

は、萩原には最大の収穫であった。二人とも中国科学技術界の重鎮^{じゅうしん}であった。なかでも郭和夫は中国の燃料関係の学界では、権威者の一人に成長を遂げていた。研究者の多くは、一九六〇年代に大慶油田開発の「大会戦」に参加していったようである。幾人か懐かしい人々のことも話題に上った。みんな元気らしい。それを聞いて萩原は安堵したものだ。だが、文化大革命以来、中国では過酷な「政治の季節」が続いていたのだ。

一九七〇年代から八十年代にかけて、中国の政治は、急速な展開をみせる。衝撃的な林彪事件が起こった。さらに毛沢東も朱徳も周恩来もあいついで世を去った。毛沢東が死んだ直後に「四人組」政変が起こる。中央政権を掌握した華国鋒政権も短命に終わる。その過程で鄧小平が不死鳥のごとく蘇るのだ。国際関係も大きく変わった。中国は「反覇権・第三世界」をひきさげ、国際社会に乗り込んできた。ニクソン訪中に続く、日中国交正常化。中国を取り巻く、国際環境は急激な変化をみせていたのだ。それを確かなものとしたのが、鄧小平が唱える「開放政策」だったのだ。

大連から引揚げてきた人々が「第二の故郷」と呼ぶ大連が急速に身近なものになったのは、八〇年代に入ってからであった。戦後初めて遼寧省の胡亦民副省長を団長とする東北経済代表団が来日したのも、ちょうどこのころのことだ。それ以降、人事の往来も経済的関係においても、濃密な関係を結ぶようになっていく。それまで軍事の要衝として、外国人の訪問を堅く禁じていた大連も開放され、今では東京と大連をつなぐ定期航空便すら飛ぶようになっていく。

生き続けている「丸沢精神」

萩原定司が二度目の大連訪問を果たすのはそれから十年後の昭和五十八（一九八三）年六月のことであった。時代は変わっていた。何よりも嬉しかったのは、自由な雰囲気^{ふんいき}が回復していたことだった。中国は鄧小平のもとでの開放政策を満喫していたのだ。このとき、萩原は思い出深い大連の街のあちこつちを散策している。大連時代に住んだわが家を見つけたりもした。萩原に対する扱いは、昭和四十八年のときとは明らかに違っていた。そのとき、萩原定司にかつて満鉄中央試験所の同僚だった森川清博士が同行していた。

旧中央試験所の表玄関に立つと、「萩原森川両先生熱烈歓迎」と看板がある。

郭和夫の案内で通されたのは、かつて丸沢常哉が執務していた旧中央試験所の所長室だ。三十年前の思い出が鮮明に蘇ってくる。二人を待ち受けていたのは、あの苦しかった終戦の時期にともに働き、科学研究所の再建にあたつたはずれも懐かしい面々であった。

改めて、二人にはあのときのことを思い出された。丸沢常哉博士はこの研究所を守るために、命を賭けた。多くの研究者も「丸沢精神」に殉じた。二人も「丸沢精神」に燃えたのだ。振り返ってみて、萩原にも森川にもそのことに悔いはなかった。いや、二人は誇りにすら思っている。

戦前、満鉄中央試験所は燃料関係の研究では世界のトップレベルの研究機関だった。目指したのは、合成ガソリンの工業的実用化であった。旧満鉄中央試験所は終戦で研究業務の中断を余儀なくされ、ソ連占領当局の管理のもとで、生活のためとはいえ、DDTや酒精の製造などもやった。

だが、同時に研究業務の再開に備え、丸沢常哉博士の指導のもとで、旧中央試験所が残した研究成果を中心に、文献の整理を丹念に行つた。それが研究を再開する上で、大きな意義を持つた。旧中央試験所が科学研究所と名称を変えて中国側に管理が移管されてからは、再び液体燃料の研究に重点がおかれることになった。二人は旧友と膝を交えて、回顧談に花を咲かせた。

科学研究所から化学物理研究所と名称を変えた旧中央試験所は、大慶油田が開発されると、石油化学の研究が主要な位置を占めるようになる。そして、今、主要な研究対象は触媒化学となり、研究員六百人のうち二百余人が触媒の研究にあつているという。森川は触媒研究の説明を受けて、これは世界でも屈指のものだと、感嘆している。森川は触媒の研究では、世界的な権威である。森川は乞われて演壇に立つた。

若い学徒を相手に中国で講義をするのは実に三十年ぶりのことである。だが、講義を始めた森川には、違和感はなかった。まるで東北（長春）大学で、かつて講義をしていた気分になっていた。とくに若い研究者は熱心だった。彼らから鋭い質問が相次いだ。それがまた、嬉しかった。

その夜、二人は旧友から招待され、盛大な宴会に出席した。十年前、萩原が帰国後初めて訪れたときに比べ、何もかもが変わっていた。あのとき、張大煌と郭和夫の二人だけが、人目をばはかるように、萩原の宿舎を訪ねるのが、精一杯の

もてなした。それが今度の場合は、胸襟を開き、旧交を暖めることができた。いや、十年前には思いもよらぬことだ、と萩原は思った。

やはり、話題の中心は旧友たちのことであった。旧友たちは新中国のなかで重要な職責を果している。二人はそのことがわがことのように嬉しく思えた。

例えば、科学研究所が中国の所管に移されてから最初の所長に就任した董晨は、中国の経済建設の中枢部門である国家経済委員会の副局長となり、また、彼は国家計画委員会でも重要な仕事をしている。

二代目の所長を務めたドイツ帰りの科学者張大煌は、温厚な紳士だった。彼は北京科学院に転出して、学問的には感光色素の研究で大きな成果を収めた。政治協商会議では主席団に上ったことであった。

当時、宋明と名乗っていた、蘇子衡は北京科学院に転出して、有機化学の分野で大きな研究業績を残している。いや、彼は政治の方面の活動も活発で、政治協商会議委員の職責を果しているほか、台湾解放運動の重要なメンバーでもある。戦前東北帝国大学で勉強したことのある彼は、日本語がとても堪能で、旧科学研究所時代には日本人の面倒をよくみたものであった。蘇子衡は丸沢常哉の九大教授時代の弟子西澤恭助の教え子であり、丸沢とはとくに親しく接していた。

そして、武衡のことも話題に上った。彼は当時、大連科学研究所の上部組織である長春科学研究所の所長を務めていた。職務柄当時は丸沢と頻繁に連絡を取り合っていた。彼は今、国家科学技術委員会の上席次官として、日中技術交流にも積極的に取り組んでいる。技術交流の団長として、幾度か団員を率いて、日本を訪問している。

大連時代で忘れることができないのは李亜農のことである。任務をおび大連を脱出した彼を待ち受けていたのは、海上を封鎖する蒋介石の海軍だった。李亜農の乗る漁船は哨戒艇に包囲され、海上ゲリラ戦を演じ、危うく脱出した。丸沢常哉は李亜農の突然の離連にショックを受けたと書いているが、李亜農も丸沢を敬愛した二人だった。

彼は解放後中国科学院上海分所の所長を務め、中国古代社会の研究にあたり、『欣然齊史論集』という著書を残している。生前、一度日本にいつてみたいと口癖のようにいつていた。それもかなわず昭和三十七（一九六二）年、丸沢博士が亡くなる少し前に亡くなっている。

化学物理研究所は、また優秀な人材を育成した。ここで育った科学者たちは全国に散って、中国各地の研究機関で指導者として活躍している。優秀な科学者を幾人も送り出し、研究者の養成機関として化学物理研究所は全国的に有名になっている。研究者の養成ということでは、丸沢の旧中央試験所時代のよき伝統を今に伝えてやる、ということであった。

いよいよ大連最後の日がきた。二人は自由市場に出向き、そして、自分たちが住んだ満鉄時代の家にも訪れてみた。萩原は叙情的な文章を書く人である。そのときの街の印象を次のように書いている。

「車は昔の大広場にとって返し、旧ヤマトホテル脇から裏山の方に登っていった。道々自分たちの目をひきつけたのは、昔ながらのアカシアの並木である。山路に進むとアカシアの緑はさらに左右からせまってくる。かつては毎年春の五月ともなれば、緑の葉かげから白い花房をのぞかせ、街路にほのかな香りをただよわせ、また秋の暴風の後にはあちこちで樹は倒れて道をふさぎ根を露出したことなどしきりに思い出される。かつて大連に住みついた人にとっては、アカシアは大連の象徴でもある」

萩原定司は昭和三十一（一九五六）年に北京・上海日本商品博覧会の総務部長として、帰国後初めて訪中する。それを第一回目として、以後、ほぼ毎年二回は訪中しており、平成元年で六十回を超えたと笑っていた。

満州開発ロマンの追認

森川清が帰国後初めて中国を訪れたのは、東京工業大学教授を退官してのち、日揮副社長に就任してからのことである。中国のプラント建設中止問題が起こった際には、日中双方の当局者に膨大な「意見書」を書き送るなど、森川博士もまた、対中関係の事業に余生をかけた。

いや、対中関係の事業に情熱を傾けだのは何も萩原や森川の二人だけではない。旧満鉄中央試験所で働き、戦後帰還した科学者の少なくない人々が、技術交流などで中国の経済建設に直接間接に関わっている。

昭和四十七（一九七二）年の国交回復以後、日中間では約八十件に上るプラントが中国に輸出され、中国の各地に建設されている。そこで見えかくれするのが旧満鉄中央試験所の人脈である。例えば、中国から大型化学プラントを受注した

日揮にしても、千代田化工建設にしても、日本触媒化学にしても、日石化学にしても、石黒正、高木智雄、伊藤四郎、石川三郎、佐久間滋、西田房雄、仁林万木雄、根岸良二といった満鉄中央試験所の関係者の顔が見えてくるのだ。いや、彼らだけでなくさらに多くの人々が戦後中国と関わりを持っている。

もはや、満鉄が解体されて、半世紀を過ぎようというのに、彼らは「満州開発」のロマンを今にひきずり、そこに関わったことを誇りに思っ生きています。対中プラント輸出に傾けた情熱は「満州開発」にロマンを見たことの追認であったに違いはないと思う。彼らは今でも「満州開発」の評価を巡って、激しい議論を交わしている。彼らのなかには、まだ依然として、青春が生きているということなだろう。

もちろん、多くの関係者はすでに鬼籍に入り、時代は容赦なく満鉄中央試験所に生きた人々の存在を風化させようとしている。

丸沢常哉は中国から帰還して七年後の昭和三十七年に大阪市立病院で静かに息をひきとった。森川清も今は亡い。阿部良之助も逝った。佐藤正典は九十余年の華々しい人生を全うした。風化の波には抗しようもない。

だが、それでも残されたものたちは、自分たちが生きた時代を後世に語り継ぐ努力を継続させている。廣田鋼蔵は八十二歳の高齢にもかかわらず、自分たちの生きた「満鉄の時代」を後世に伝えるべく、何と七百枚にも上る原稿を書き上げようとしている。気迫だけで書いたのだろうか。

廣田鋼蔵の歴史認識によれば、満鉄中央試験所が幕を閉じたのは、昭和三十年だという。丸沢博士が四川省の山奥から帰還したのは昭和三十年だった。廣田は戦前の満鉄中央試験所だけでなく、戦後中国に留用された人々のことをも視野に入れながら満鉄中央試験所の歴史を語り継ごうとしているのだ。廣田も丸沢常哉という人物の存在にこだわりを持っているのだ。

満鉄中央試験所の関係者は個人の努力としてだけでなく、組織的にも「満州開発」のロマンを語り継ぐ努力を重ねている。その一つは満鉄中試会であり、「丸沢精神」を継承して組織されたという、東方科学技術協力会の存在である。東方科学技術協力会の設立趣意書には、こんなことが書かれてあった。

「本会は主として中国側の要請に基づいて科学技術及びこれと関連する各分野の諸問題に対して研究、企画、提言、交流、その促進等の諸協助活動を展開し、

もって日中両国の友好、繁栄の道を拓き、これを端緒としてアジアを含めた世界総ての国々の平和と安定に貢献することを目的とする」

彼らの夢は果てしなく広がっている。森川清も東方科学技術協力会の創設に関わった二人だが、生前、森川は東京工業大学の教授を務める長男陽をともなつて中国を訪れた。

そのとき、森川博士は撫順に足を伸ばしている。撫順には、多くの思い出が残されている。森川博士は、解放後中国側の要請に応じて、東北（長春）大学から転じて、オイルシール工場の復旧作業にあたった。

満鉄時代にオイルシールの精製工場として使われていた設備は、大慶原油の精製工場に変わっていた。当時の設備は原油処理設備として転用されていたのだ。蒸留塔もパイプラインの配置も往時のままだった。大連の科学研究所から運び、据え付けた水添加法による石炭液化用のパイロットプラントも、立派に実用に供されていた。

この工場で年間五百万トンを超える大慶原油が、処理されているのを見て、森川博士は自分たちの努力が無駄ではなかったことを知った。今、撫順ではガソリンの需要増大に対応するため、新しい原油精製設備の導入を検討している、という話を聞いて、森川博士は感慨を新たにしたものだった。

森川の長男陽は、父清の学業を継ぎ、触媒の研究では世界の第一者との評価を受けるまでに成長を遂げた。森川博士は当時のことを、家族にも詳しくは話しかことはない。父清がパイプラインの配列や計測器などのぞき込みながら、「今でも立派に動いているじゃないか」といったことを陽は鮮明に覚えている。その陽は、もう一つ、父清の業績を引き継いで、東方科学技術協力会の副会長を務めている。

東方科学技術協力会の会員名簿をくくっていたら、もう一人見覚えのある名前に出会った。丸沢常哉の姪美千代である。いや、この名簿には、旧満鉄中央試験所の関係者だけでなく、かつて満州にかかわった大勢の人々の顔があった。

そのなかには、美千代や森川陽のように二世や三世の名前もあった。満州大陸との関係にこだわり、満州大陸に青春の情熱をついやした人々の熱い思いが伝わってくる。

彼らの中国大陸にかけたロマンは、確実に世代を超えて生き続けている。